鵜飼の話

岩波写真文庫　229

岩波写眞文庫　229　鵜飼の話

編集　岩波書店編集部
監修　神谷俊雄
写真　神谷俊雄　岩波映画製作所

鵜飼見物の後で鵜匠から説明をきく

「おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉」と芭蕉はよんだ。今鵜飼を見物する人々は、川面を埋める舟と、その灯のはなやかさと、勇みたつ鵜匠と鵜を見るだけで、この心持はないだろう。わずかな期間、主として人々に見せるために行われる鵜飼のかげには、長い間に得た経験によって、鵜を捕えたり、慣したりする生活がかくれているのだ。そのことを知れば、一層鵜飼を見る心持は深くなるであろう。

この本をつくるにあたり、鵜匠、山下善平氏の御協力をうけた。また鈴木寛司、瀬古写真館、神山典之、浅井哲夫の諸氏からは写真の提供をうけた。

映画で外国にも紹介される

目　　次

定価100円　1957年 6 月 25 日発行 © 発行者 岩波雄二郎　印刷者　米屋勇　印刷所　東京都港区芝浦２ノ１
半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ッ橋２ノ３株式会社岩波書店

中国の鵜飼は揚子江上流地方を中心に、中国の西部及び南部地方に広く行われて居り、その方法も地方によって多少異っている。昼間行うのもあれば、夜間火をたいて行うのもある。ウはすでに家畜化したため、羽色が白くなったものもいる。この中国の鵜飼は、すでに十四世紀から旅行者の記録によってヨーロッパの人人に知られており、十七世紀に英国をはじめ西欧の数ヵ国に於て、雛を巣の中から捕え馴らして鵜飼を行ったことがあるが、長くは続かなかった。

山東省済寧付近の鵜舟

欧州の鵜飼に使われたカワウ

中国の鵜飼に活躍するカワウ

日本で時々鵜飼に使われるカワウ

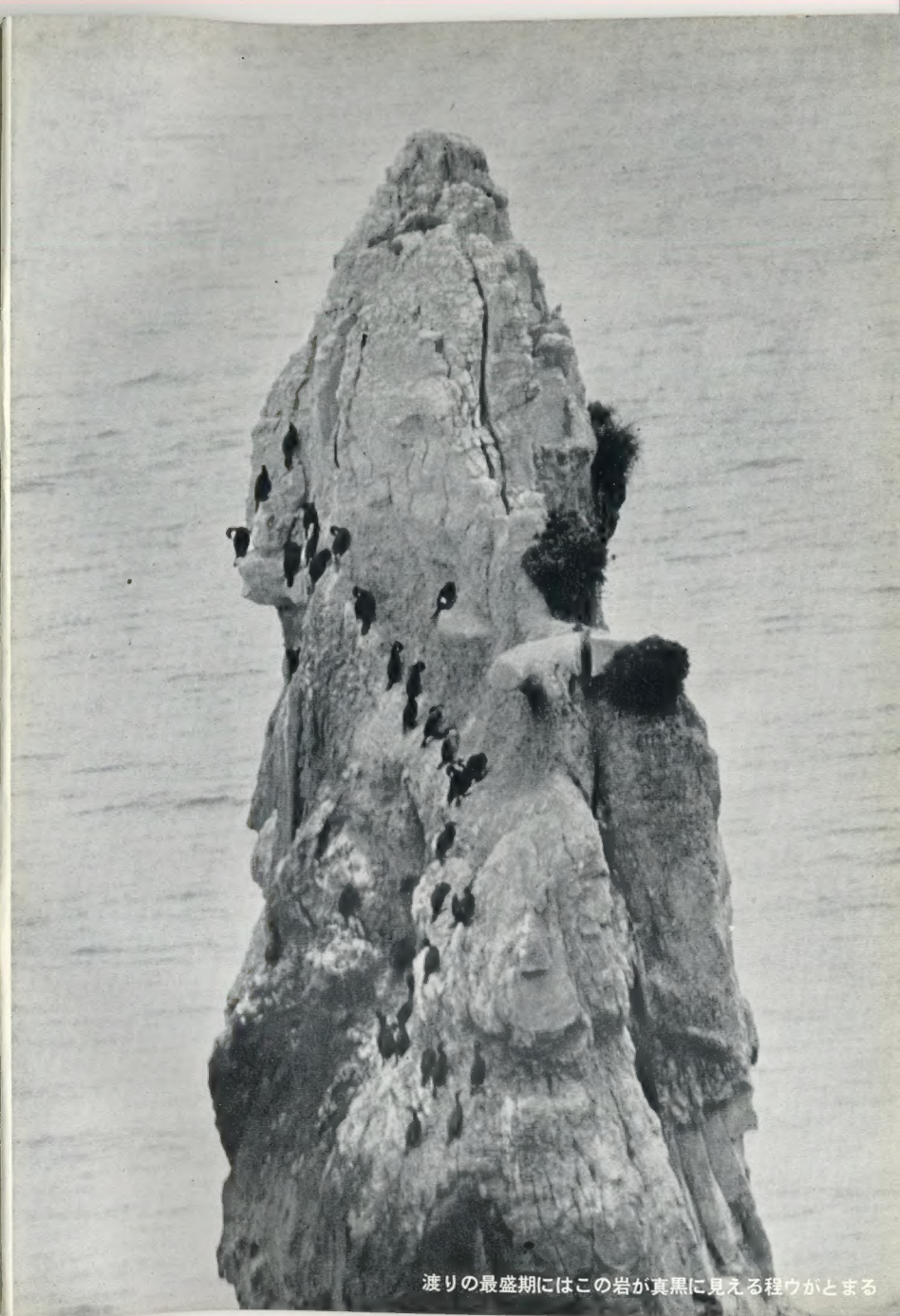
我国の鵜飼の主演者ウミウ

漁猟用動物にはタカ・ハヤブサの類とウがある。我国でいま利用されているのはウだけである。ウは世界に二十六種いるが我国では四種を見ることができる。現在鵜飼を行っているのは日本と中国のみである。日本の鵜飼には主としてウミウを使うが稀にカワウを用いることがある。いずれの場合にも野生のウを飼い馴らして使用する。中国で鵜飼に用いるウは我国のカワウに近縁のシナカワウで、鶏を用いて孵化育成しているから、ウの家畜化の程度は中国の方が進んでいる。史上最初の鵜飼の記事は隋書に載っており、それによると六世紀末に日本で鵜飼が行われたという。中国の歴史に鵜飼が現われたのはそれよりはるかに遅い。記録を重視すると鵜飼の発生は日本の方が早いと考えやすいが、揚子江流域が鵜飼の発生地で、そこから日本へ伝えられたと考える人が多い。これに対して中国と日本とでは鵜飼の方法が違うので、別別に発生したと主張する者もいる。

茨城県豊浦海岸にある島の岩壁で翼を休めるウミウとチシマウガラスの群

鵜捕場の上空を飛ぶウミウ

ウミウは東北地方、北海道、千島で繁殖するが、越冬地は東北地方以南の荒海や岩礁の多い海面である。冬期は伊勢湾にも飛来するから、篠島や知多半島でもウミウを捕獲することができた。大正十一年以前には長良の鵜匠は茨城県でウミウが捕獲されることを知らないで、伊勢湾で捕獲されたもののみを用いていた。ウミウが冬鳥として渡って来るのは十月中旬から一月下旬までで渡りの最盛期は十一月中旬である。又繁殖地へ向って渡るのは三月下旬から五月下旬までで、最盛期は五月上旬である。春の渡りでは初めに老鳥が北上し、その後から二歳鵜がつづき、最後に三歳鵜が渡って行く。この時期は交尾期に当るので、雌鳥は交尾により翼肩羽（よくけんう）を著しく傷めている。ウミウの群は割合に低空を一列横隊をなして飛ぶので、渡りの最盛期にこの横隊がいくつもつづくのは壮観である。群の大きなものは四、五百羽からなり、小さなものは二、三羽からなる。鵜捕場にとまるのは小群だけである。

最盛期のウの渡り

渡りの最盛期にはこの岩が真黒に見える程ウがとまる

給餌中の親と雛

頭部に寄生するダニ

抱卵中の３歳ウ

まだ飛び立てぬ子供

ウミウは岩礁上や岩壁の棚の上に枯草や海藻を使用して皿形の巣を作る．産卵期は５月下旬から７月で，普通４個か５個の卵を生み雌雄交互に抱卵する．卵は淡青色で表面は石灰質で覆われている．孵化直後の雛は裸体のままであるが，急速に暗黒色の羽が疎生し，やがて全身に密生する．雛が孵化すると親鳥は抱温と育雛を開始する．雛に給餌するために親鳥は魚をのみ込んでから巣に帰り嘴を開くと，雛は親鳥の喉の中に頭を挿入し，親鳥の胃の中で半ば消化した魚を摂取する．四歳未満のウミウは羽色でかなり正確に年齢を鑑定することができる．鵜飼に使うために訓練する鵜は２歳未満のものに限られている．

ウミウの巣と卵

４歳以上の野生のウミウ

巣の中で縄張を守る２歳ウ

気管を握りしめぬように注意しながら頚をつかむ

モチ玉を岩にはる

ウの体からモチを取り米糠をまぶす

ハシカケをつけ眼瞼を縫ってから輸送籠に入れる

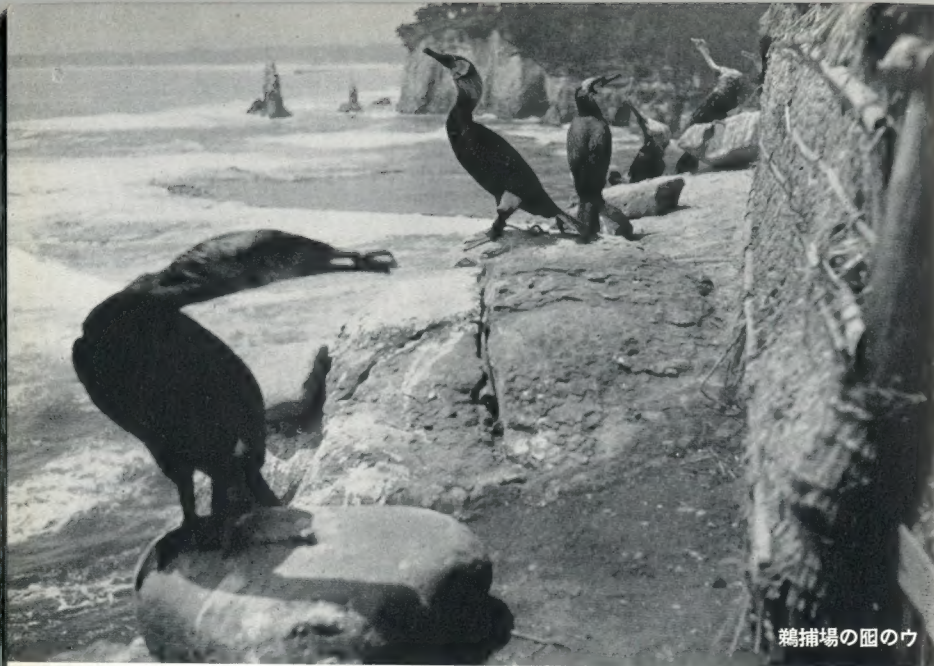
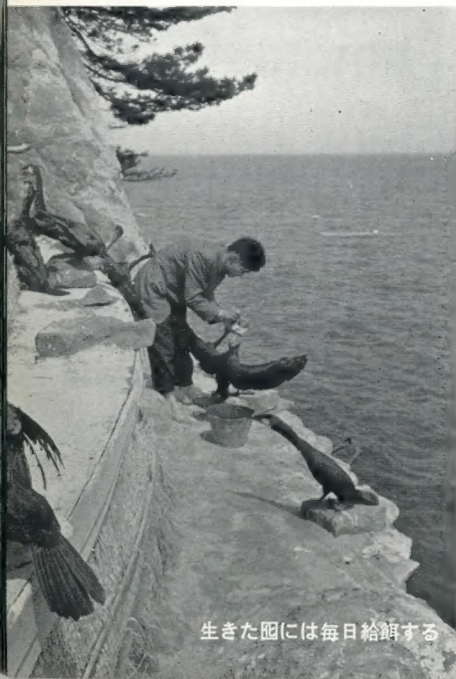
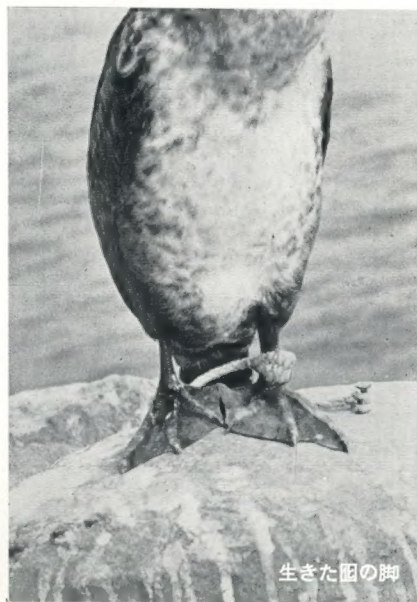
昔から伊勢湾においてもウミウを捕獲して長良川へ送っていたが，茨城県でウミウが獲れることがわかってから，伊勢湾の捕獲は重視されなくなり，昭和26年以来全く行なわれなくなった．ここで獲れたウは，馴らすには難しいが，強健で鵜飼にはよく働く．伊勢湾では，ウのよくとまる岩に囮を置き，傍の岩に数個のモチ玉をはりつけ，これにウのとまるのをまって捕えた．現在島根県で実施中のウミウの捕獲もこれに似ているが，ウが脚にモチ玉をつけたまま海中に飛込んで逃れるのを，舟で追いかけモチ竿で差し取る点がちがっている．

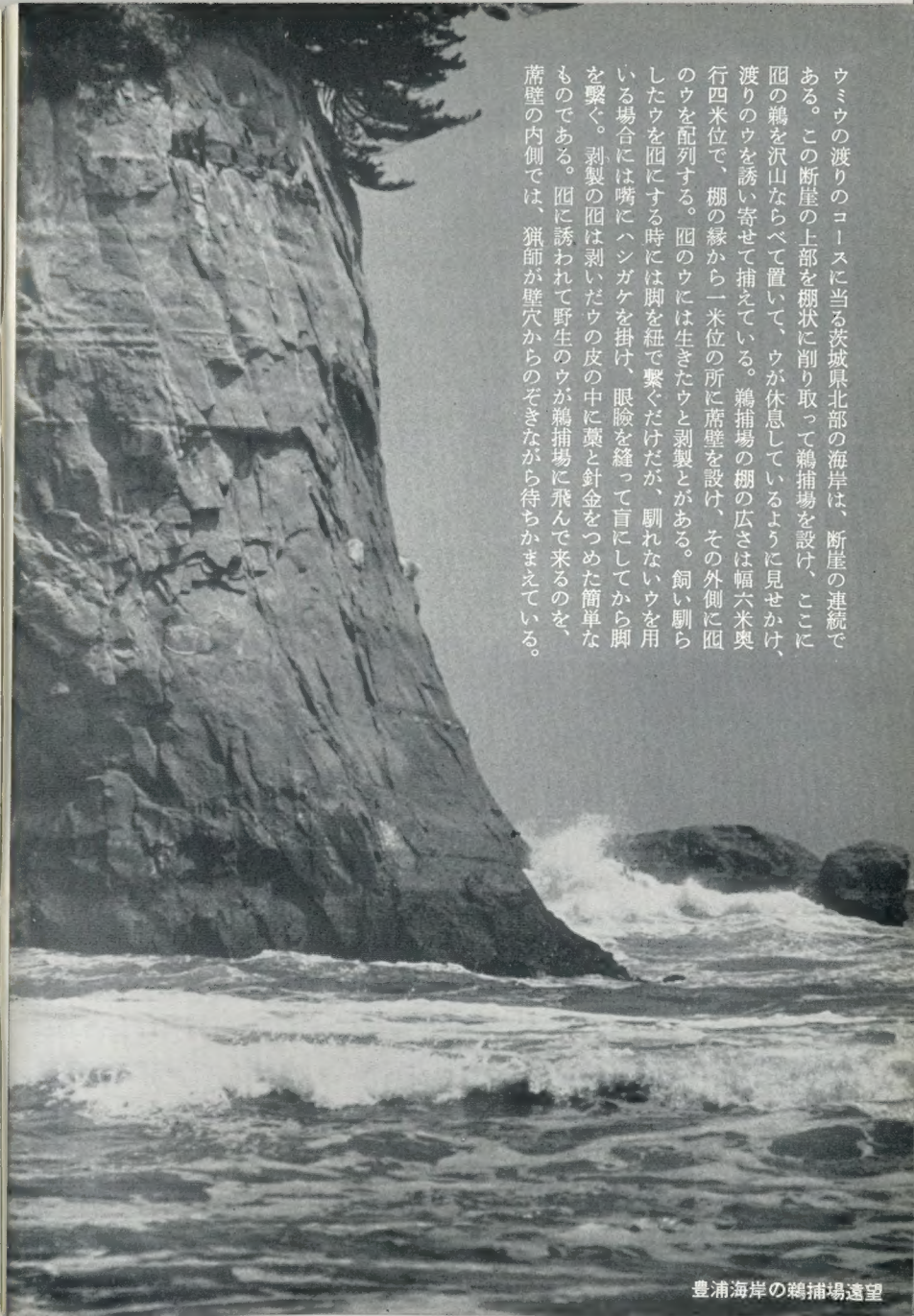
網をかぶせて頚をつかむ

岩の上にモチ玉をはりつけ，その側に囮を置いて遠くから監視する

囮に誘われて野生のウが飛来して岩の上にとまる

鵜捕場の囮のウ

生きた囮には毎日給餌する

生きた囮の脚

ウミウの渡りのコースに当る茨城県北部の海岸は、断崖の連続である。この断崖の上部を棚状に削り取って鵜捕場を設け、ここに囮の鵜を沢山ならべて置いて、ウが休息しているように見せかけ、渡りのウを誘い寄せて捕えている。鵜捕場の棚の広さは幅六米奥行四米位で、棚の縁から一米位の所に蓆壁を設け、その外側に囮のウを配列する。囮のウには生きたウと剥製とがある。飼い馴らしたウを囮にする時には脚を紐で繋ぐだけだが、馴れないウを用いる場合には嘴にハシガケを掛け、眼瞼を縫って盲にしてから脚を繋ぐ。剥製の囮は剥いだウの皮の中に藁と針金をつめた簡単なものである。囮に誘われて野生のウが鵜捕場に飛んで来るのを、蓆壁の内側では、猟師が壁穴からのぞきながら待ちかまえている。

豊浦海岸の鵜捕場遠望

鵜捕場にとまった野生のウミウ

自分がさされるともしらずにモチ竿を見る

鵜捕場の囮

鵜捕場にウがとまると猟師はモチ竿を極めて徐々に壁の下端から差し出す．僅か1米を出すのに5分もかかる．そしてモチ竿を胴体と風切羽の間の隙間に差し込み，両翼の風切羽を同時に巻きつけ，モチ竿をウの後方へ引きながら蓆壁の中へ引き込む．風切羽をモチ竿に巻きつけられるとウは逃げられなくなる．ウがとまる時は必ず風上に向ってとまるから，多くのウが同時にとまっても一番風下のウから順次差し捕ると，風上のウは気付かないから全部のウを捕えることができる．

ウを差す

モチ竿を準備する

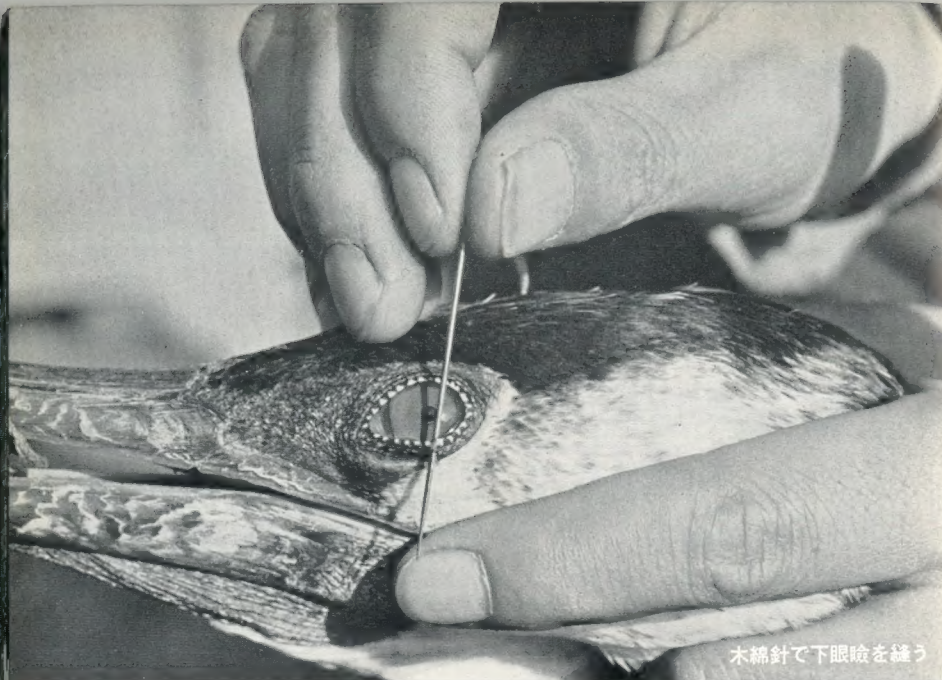
モチ竿を徐々に差し出す

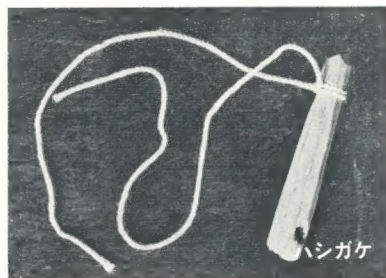
ウを差して引き込む

ハシガケをつけた嘴

嘴にハシガケをつける

鵜捕場から獲物を運び出す

野生のウの嘴はかみそりのように鋭い。ウを捕えると嘴で傷つけられぬように注意しながらハシガケをつける。ハシガケをつけるとウの取扱いが容易になる。ハシガケの木部には小さな穴があり、ここに上嘴の先端を挿入し、ハシガケを上嘴に縛りつけ更に下嘴に縛りつける。ウの嘴には鼻孔がないから、上下の嘴を堅く縛りつけるとウは窒息する。

木綿針で下眼瞼を縫う

眼瞼を縫った糸をしばる

ハシガケ

捕えた野生のウを輸送する場合に、発送する直前に眼隠しをすると輸送中静かにしているが、眼が見えると逃げ出そうとして事故を起しやすい。眼隠しをしないウは鉄道では取扱わない。ウの眼隠しをするには左右の下眼瞼に木綿糸を通してから、糸を上の方へ引き上げて額の上で縛る。すると下眼瞼で眼球を覆い隠すから、眼隠しすることになる。

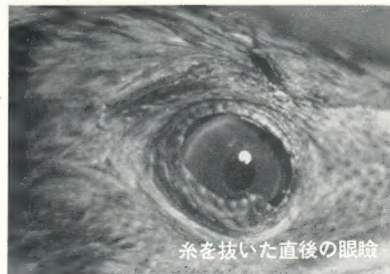
発送前の輸送籠

鵜匠が嘴をしらべる

ウにハシガケをつけ、眼隠しをしてから、首を紐で軽く縛り、輸送籠に入れて発送する。長良の鵜匠のもとにウが到着すると籠から出され、検査を受ける。使いものになると鑑定されると、眼瞼の糸を切取り開眼してから、片翼の初列風切羽を八、九枚切り、飛べないようにされる。鵜飼のウの風切羽を切り取るのはこの時だけで、その後は切取らない。

壁土の粉をふりかける

糸を抜いた直後の眼瞼

鵜匠のウの検査

新鵜の嘴の手入が済んでから温湯で行水をさせ、麻布でふき汚物を取り、全身に乾いた壁土の粉を塗る。体温で壁土が乾くと、トリモチその他の汚物が一緒におちる。二、三日行水と土浴を繰返す。最初の土浴の後で給餌する。新鵜は腰蓑で眼隠しした鵜籠に入れ二、三時間おきに取り出し、声をかけながら喉をさすってやると次第に人になれてくる。

ウを温湯で行水させる

鵜匠はウを両足の間にはさんで坐り，嘴の手入れをする

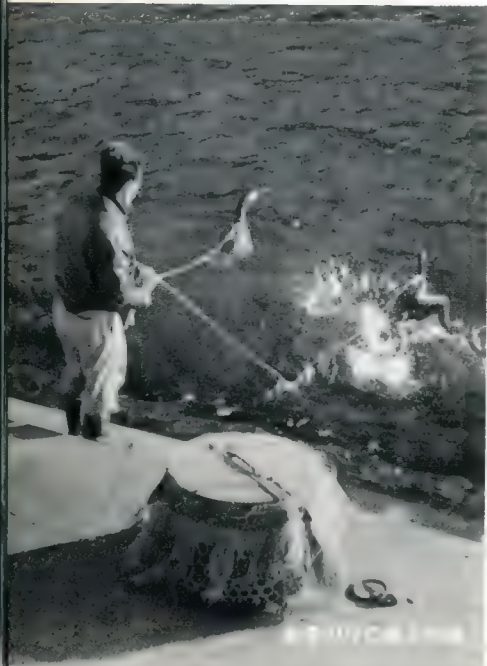
手入前の嘴

[illegible]

新鵜の検査がすむとハシガケをはずして嘴の手入を行う。ウの嘴はかみそりのように鋭いので、鋭い部分を小刀で削り、更に上嘴の先端を削って短くし、上嘴の先端の彎曲部の内側を削り、上嘴と下嘴の間に楔形の隙間を作る。このように手入をすると、嘴にはさまれても傷がつきにくくなる。

新鵜の[illegible]

手入後の嘴

[illegible]

嘴の手入後もウが人に馴れるまでハシガケをつけておく。その後も時々嘴の手入を行う。新鵜は到着後二、三日してから苧縄をつけて泳ぐ訓練をするが、最初は恐怖で泳げない。馴れると泳ぐようになる。この訓練の際にウに鵜籠を教え、また鵜籠にとまることや、舟べりにとまることを教える。

はなされたウは集団になるので，この集団を舟でかこみ，ウを掛け声で呼んだり，棹で追ったりして魚を食べさせる．餌飼によって鵜飼期間中の疲労を回復し，次のシーズンに備える

ウを舟でつれ出し，川の中にはなして魚を捕食させることを川餌飼(かわえがい)という．その期間は10月16日から3月14日までで，新鵜が人に馴れると他のウと一しょに川餌飼につれてゆく．

休息中ウは翼を拡げて羽を乾す．休息後1羽ずつウを検査し，余分に食べた魚を吐き出させて，食べ足りないウにこれを食べさせ，頸にニゴを掛けてから鵜籠に入れ舟の中へ運ぶ．

ウは満腹すると頸が太くなり，潜水しなくなる．ウの大部分が満腹してから集団のまま川から岸へ追い上げ，ウと川の間にバリケードのように鵜籠をならべてからウを休息させる．

川餌飼は日帰りで行うこともあれば、長良川や揖斐川へ一ヵ月以上も泊りがけで続けることもある。昔は大風や大雪の時および河水の濁った日以外は餌飼を休まなかったが、今では天気の悪い日は悉く休んでいる。休む日には魚を買って一羽に八百瓦ずつ舟の中で食べさせる。餌飼は一隻の舟に二人乗込んで行うが、鵜舟に泊り込むのは一人である。

事用具や食料は舟の中央に

泊り餌飼をする時には鵜舟にウを積込むほか、食料、燃料、衣料、寝具、炊事用具、苫等を積んで出掛ける。炊事用具は狭い舟の中の空間をふさがぬようにできている。餌飼をしたり舟を漕ぐ時には、苫を邪魔にならぬように畳込む。炊事用具と燃料と食料のために、鵜舟の中央に約一立方米の空間をさくが、一人一ヵ月分の食料と燃料が積込める。

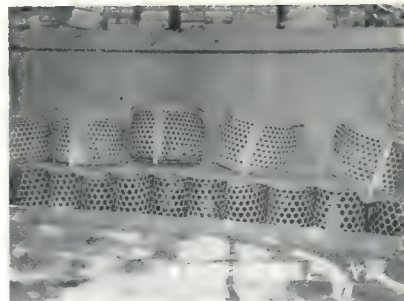
晴天の夜には鵜舟の上の

停泊する際に鵜舟

中で

泊り餌飼に出ている間は、天気がよいと十時頃に餌飼を始め十一時頃に終る。魚が少ない所では餌飼が四、五時間もかかり、ウはちりぢりに分れるので捕えるのに苦労する。鵜匠等は稲藁の最先端の一節をニゴといい、ニゴを用いてウの首を縛っている。ウは食べた魚を吐き易いので、なるべく多くを消化させるため、首にニゴをかけ吐き出すのを防ぎ、消化された頃に不消化成分を吐き出させる目的でニゴを切取る。餌飼中ウは過食しやすく、過食すると胃の中で異常醱酵を起すが、首にニゴをかけてなければ、胃の内容を吐き出してしまう。その時ニゴを掛けていると中毒を起して死亡するか、廃鳥になる。ウが苦しみ始めたら直ちにニゴを切らねばならない。そのため鵜匠は午後八時頃までウに気を配ることを余儀なくされるからゆっくり眠れない。ウに異常がなくとも夜中に苫の外に出てニゴを切るから体がすっかり冷え切ってしまう。泊り餌飼をする間中、夜になると舟の上を蓆と苫で完全に覆い、その中で鵜匠はウと一緒に寝るので、ウの排泄物から発散するガスと悪臭から逃れることはできない。

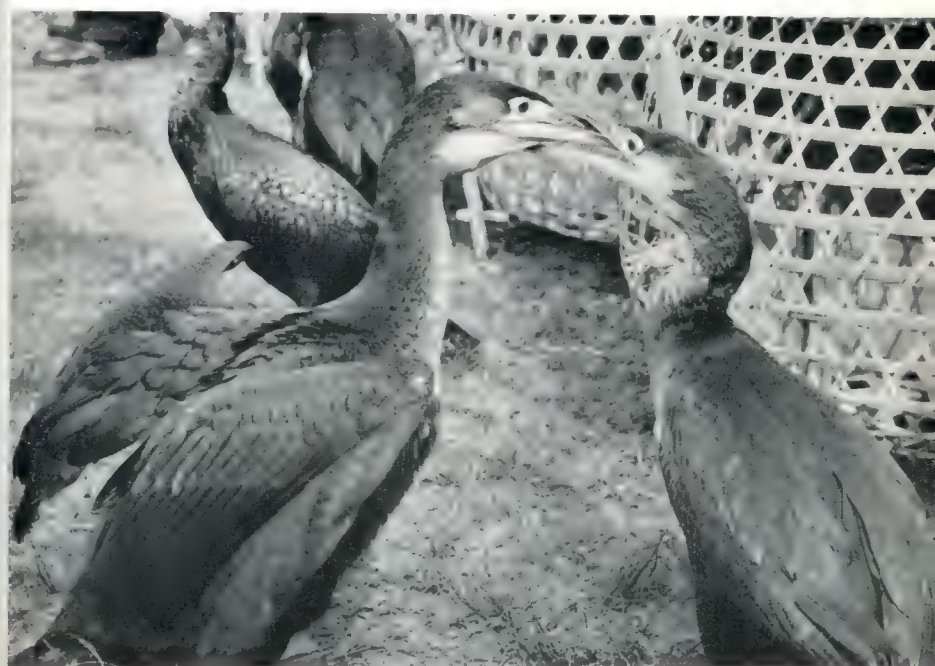
ニゴを切る

ウを車で運んで、日帰りで餌飼することを陸餌飼という。陸餌飼する人達は鵜籠を運ぶ者とウを追う者に分れる。放されて前進するウの群の前後から、ウを追う者は棹を用いてウが速く移動しすぎるのを抑制したり、遅れるウを追いたてたりする。籠持ちは先廻りしてウの上陸地点へ籠を運ぶ。ウを上陸させた後の取扱法は川餌飼の場合と同じである。

河水が濁ると鵜飼も餌飼もできない。又大雪の日や強風の日には餌飼ができない。こんな日には魚を買ってウに給与する。鵜匠の自宅のトヤの前でウに給餌することもあり、また泊り餌飼中の鵜舟の上で給餌することもある。給餌するにはウに手で水をすくって飲ませてから八百瓦位の魚を給与し、その後でウの首をニゴでしばってから、鵜籠に入れる。

岐阜県では魚族保存のため漁業調整規則により三月十五日から五月十日まで餌飼が禁止されている。鵜匠たちは五月十一日以後の鵜飼に備えてウのコンディションを整えるために、毎日忠節用水にウを連れてゆき、三十分位放して購入した魚を投げ与え、給餌を兼ねて訓練を行う。この場合のウの取扱い方は餌飼と同じであるが給餌する点がちがう。

長良川の鮎漁の解禁は他の河川より早いので、解禁当初に漁獲が多いことが経済上望ましい。競走馬には競馬に適した状態があり産卵鶏には産卵に適した状態があるように、ウには魚を獲るに適した状態がある。この状態を鵜匠は長年の経験から会得し、解禁直後にアユを多く獲るように餌と運動を加減し絶えずウの体を調整することに務めている。

ウは集団で生活をする習性があるが仲のよい仲間以外は近くへ寄せつけない．このような性質があるので，鵜飼の終了後ウを舟ばたに並べる際にも並べやすい順序が自然にできる．

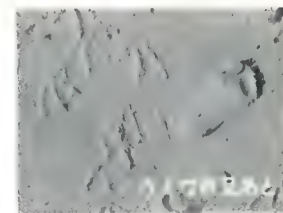
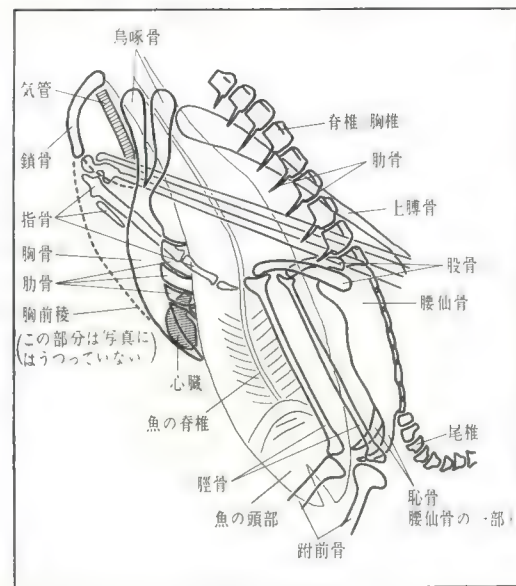
ウは仲のよい２羽を一緒に籠の中に入れておくか，籠から出すとお互に愛情を表示しあうことがある．餌飼の後や鵜飼の前後にも，互に愛情を表示しあうのを見かけることがある．

陸鯏飼．魚を追うウの群

ウの全身の羽の美しい光沢は尾羽の付根にある油壷から出る脂肪を塗るためである。健康なウは嘴を使ってこの脂肪を全身に塗っている。鵜飼や餌飼の後で羽を乾す際には、ウは化粧しないが、その後でウを籠に入れると一生懸命に化粧をする。即ち長い嘴を用いて全身の羽から汚れを取り去り、脂肪を塗って、乱れた羽を整える。ウが病気になり化粧をする元気がなくなると、間もなく全身の羽は光沢を失い、乱れて毛羽立ってきて水にぬれ易くなる。鵜匠は羽の光沢を健康診断の一つの手懸りとしている。嘴の先端は殆んど全身にとどくけれども、頭と頸の上部にはとどかない、その代りに趾がとどくが、趾は嘴ほどの仕事ができない。それで頭部がウの盲点になっている。野生のウにはダニが寄生しているが、寄生部位は頭部に限られている。

嘴を使って化粧する

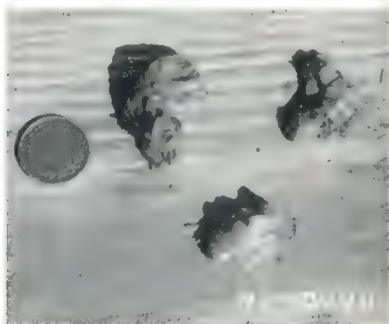
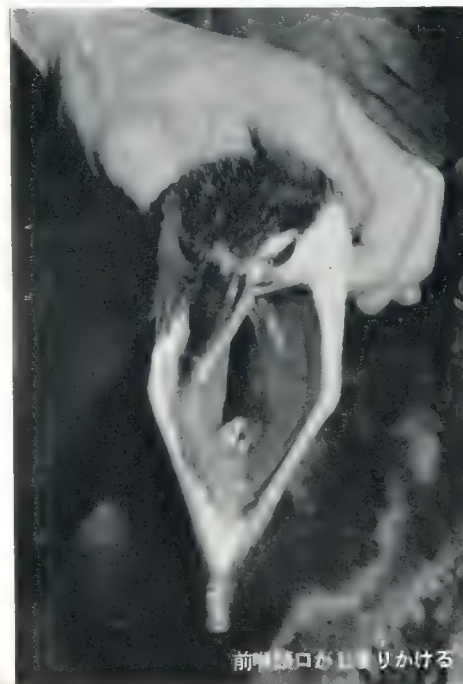
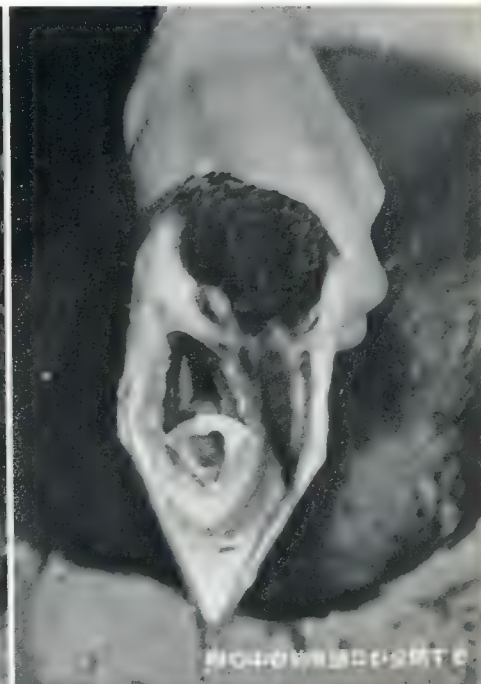
鵜飼のウは春さきに求婚舞踏をする。夏期にも見られるが春さきが最も多い。求婚舞踏はウが肉体的にゆっくりしている時に多く見られるが、鵜飼の際にウに手縄を取り付けた直後にも、鵜飼中に漁を中絶して休息するような時にも、しばしば見ることがある。求婚舞踏をする時には頸を上の方へ伸ばし、喉を前方へふくらませて、両脚を一緒に揃えてゆっくりとピョンピョンと前方へ跳びながら、互に相手の前方へ自分の体の側面を向けるように前進する。そして互に低声で「アーオー、アーオー」と唱いあう。この場合にもし雌が雄を受け入れる姿勢をとりさえすれば、交尾の段階に入るのであるが、交尾は極めて稀である。現在のようなウの管理をしていても稀には性生活をしているが、卵を産んだことはない。従って雛を孵化したこともない。

このレントゲン写真は二・七瓩のウが六百瓦の魚を嚥下してから二十分後に撮影したもので、魚の頭部はウの胃の中に入って居り、魚の胴体は食道の中にある。この「鵜呑み」にした魚は約七時間で消化されたが、小魚はもっとはやく消化される。この写真からわかるようにウの胃は排泄腔(俗に肛門という)の近くにある。昔鵜匠の間では鵜の消化器官は食道と胃だけで、そのすぐ後に肛門があると言われていたが、腸もあることは他の鳥と変らない。ウが食べた魚の量は、昔から鵜匠が行っているように、排泄腔の付近に手を触れて胃を探れば、或る程度正確にわかる。

ウミウの骨格

陸上ではウは足を交互に前に出してよちよち歩くが第一趾には殆んど体重をかけない(上の足跡の写真参照)。ウの移動する速力は陸上の歩行が最も遅く、水上の遊泳はそれより速く、潜水すれば更に速く進み、空中を飛翔すれば最も速く前進できる。鵜飼中、ウは潜って泳ぐ時に鵜舟より先へ進み、水上に出て泳ぐ時に遅れる。

我国の鵜飼は中古から近世にかけ関東以西の地方で広く行われていたが、現在では長良川その他数ヵ所に残るに過ぎない。文献に残った長良川の最古の鵜飼は一四七三年の事であり、一六八八年には岐阜の鵜匠が一人で十二羽のウを使ったと記録されている。長良川の鵜飼は信長以来将軍大名の庇護を受けたが、明治に入り宮内省の保護を受け、更に漁政よろしきため命脈を保ち、戦後岐阜市の援助を受けて、観光としての脚光を強く浴びるようになった。長良川の鵜飼は毎年五月十一日に始まり十月十五日に終る。明治二十三年宮内省の保護を受けるようになってから、毎年御料鵜飼を行うようになったが、終戦後も御料鵜飼は継続して行っている。一年に八回の御料鵜飼を行うが、うち二回は我国駐在の大公使等外交団の観光鵜飼を兼ねている。長良川の鵜匠は世襲で継承されており、現在岐阜に六人、小瀬に三人いる。岐阜では漁場の位置により鵜飼を上・中・下に区別している。水量やアユの移動状況により漁場をかえる。長良川の鵜飼は夜間篝火をたき、鵜舟で川を下りながら、鵜匠が手縄をつけた十二羽のウを使って鮎漁を行い、観光鵜飼を兼ねている。

トヤから河畔へウを運ぶ

舟の毛立ちを焼く

溯上時刻には順風が多い

鵜飼をする間に舟底が石にすれ毛立つので，鵜舟を時々乾して毛立ちを藁火で焼き取る．毛立を取ると水の抵抗が減り舟足は軽くなる．鵜飼の季節になると毎朝ウをトヤ籠から鵜籠に移して通風のよい河畔へ運び，盛夏の候には蓆で日覆をして２～３時間おきに籠に入れたまま水浴をさせながら飲水させる．鵜飼の準備がすむと鵜舟で溯上する．溯上にはなるべく帆を用いるが，又曳き綱や棹や櫂も用いる．

ウの水浴と飲水

食事をする

手縄を検査す

ウに水を飲ませ篝の支度をする

鵜飼の開始地点まで鵜舟が溯上すると，舟を河原へ引き上げ，溯上にのみ用いる用具をかたづける．鵜籠を川の中に入れてウに水浴をさせて，水を飲ませてから河原に並べる．又篝の柄を鵜舟の舳の孔に挿し込み，篝火の支度をする．その間に鵜匠は舟から約 20 米ばかり離れたところに，手頃の石 3 個を鼎の形に並べて火どこを作り，茶をわかしながら手縄を検査する．茶がわくと一艘の鵜舟毎に乗組員が火どこを中心として食事をすませる．食事後一同談笑しながら日没をまつ．

汗でぬれたシャツを干す

麻布をひとま

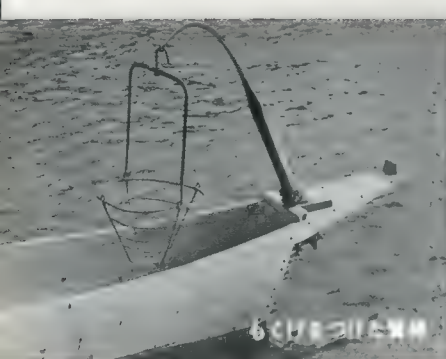
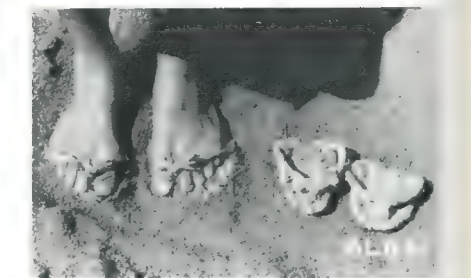
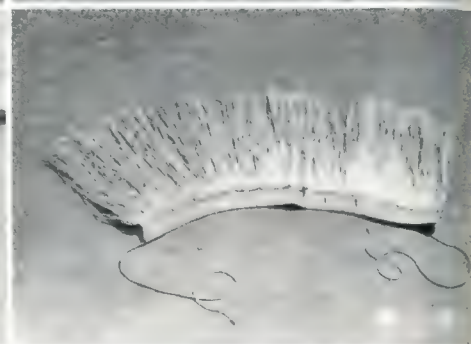
布の両端をし

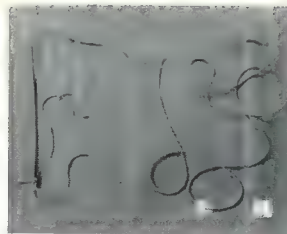
ふたまわり巻き

風折烏帽子をつけお

漁服の袖口

長良川の鵜匠の漁服と胸当は黒色の木綿で作り袖口はコハゼでとめるようになっている。徳川時代の末期までは袖が長く鵜匠は襷がけで鵜飼をしたという。かぶりものは俗に風折烏帽子とよばれ、幅三十四糎長さ約百五十糎の黒色の麻布で、烏帽子形に頭に巻きつける。鵜飼中に篝の火の粉をかぶるので頭髪を保護するため用いる。腰蓑は藁で作り幅百三十糎長さ七十糎で、両端に百三十糎の紐がついている。

もくげをつけた篝棒

あしなか

あしなかは幅十糎長さ十糎位の藁製の草履で鵜舟の乗組員全員がはく。鵜籠は高さ四十五糎位で、大きいのは中の隔板で二つに区劃され、各区劃に二羽ずつ合計四羽を入れ、小さいのは二羽を入れる。長良の鵜は、鵜飼と餌飼の時以外は昼は鵜籠の中で過し夜はトヤ籠の中で過す。木槿の細い茎を篝棒に添えてさんつぼにはめ込むと、木槿の茎がつぶれて樹液がにじみ出るので篝を容易に動かす事ができる。

ウの体の状態をしらべる

夕闇迫る頃に籠から一羽ずつウを取り出して健康状態をしらべ、その後で鵜匠は胸当、風折烏帽子、腰蓑の順に身につける。出漁直前に艫乗(とものり)の手伝を受けながらウに手縄を取付ける。手縄は予め水に濡らして置く。首結(くびゆい)のしめかたは最も苦心するところで、しめ過ぎてもゆるすぎても不漁の原因になる。

手縄は首結(くびゆい)・腹掛(はらがけ)・鯨鬚(くじらひげ)・桧縄(ひのきなわ)等から出来ている。首結でウの首を縛り胃に入る魚を制限する。腹掛でウの胴体を縛るとウを舟に引き上げるのに役立つ。鯨鬚は手縄がウの体に絡むのを防ぐ。桧縄は桧の木質部を細くさいてなったもので、水に濡れても縺(もつ)れを解きやすい。桧縄を使うので十二羽のウを捌くことができる。

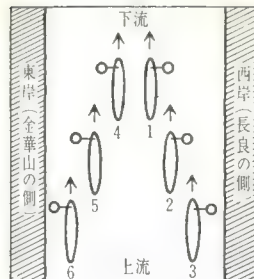
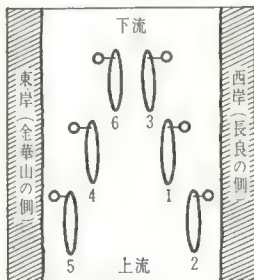
川の浅い所で

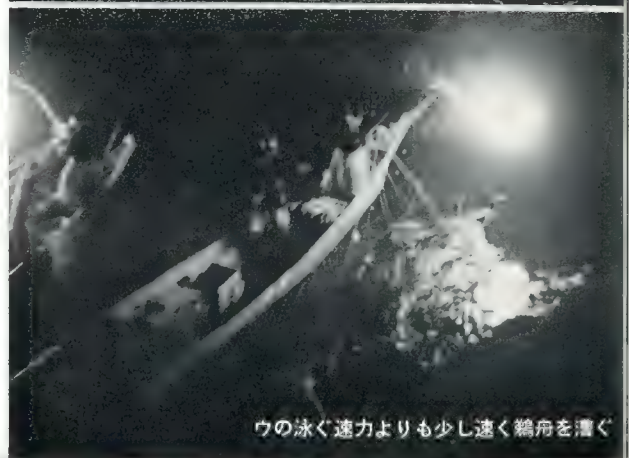
鵜飼漁をする際に、鵜舟は一定の隊形に並んで行動するが、その排列順位を各舟の艫乗が籤で決める。籤番の艫乗が一本の縄で六つの輪を作り輪の順序を見せぬように握って他の艫乗の前に差し出す。各自思い思いの輪に指を入れると籤番は輪の順序をしらべる。輪の順序により艫乗の舟の順位がきまる。

鵜匠は左手で手縄を握り右手で

鵜匠がウにつぎつぎと手縄を取りつけると、側にいる中鵜使（なかうつかい）がこれを保持する。全部のウに手縄をつけ終えてから八羽のウを籠に入れ、鵜匠は十二羽のウの手縄を持って舳に立つ。手縄のつけ終わる頃に中乗（なかのり）が篝火に点火する。最後に最後尾に乗る船頭の艫乗が鵜舟の順位を決める抽籤をすませて乗込み、鵜飼が開始される。

鵜匠，中乗，中鵜使，艫乗の順に乗り，中乗と艫乗が舟を操り，中鵜使は6羽のウを使う

総がらみは今ではショーとして行われる

鵜舟が編隊で漁をすると先頭の舟が最も漁が多い．また流れの静かなところから瀬にかかると急に漁獲が多くなる．それで公平を期するため抽籤を行い，鵜舟の排列順を決め，瀬にかかる毎に先頭を交代する．鵜舟は抽籤順位に従い上図のように並んで漁を始めるが，瀬に差しかかる直前に最後尾の舟が先頭になり下図のように並び変えて漁を続ける．鵜舟を川幅いっぱいに一列横隊に並べ，魚を一方の岸へ追つめて漁をする方法を総がらみという．昔は貴賓の舟に対して敬意を表すために総がらみを行った．

瀬の上に差しかかると鵜舟の排列の順序を変える

後の舟が前に出ているところ

ウの泳ぐ速力よりも少し速く鵜舟を漕ぐ

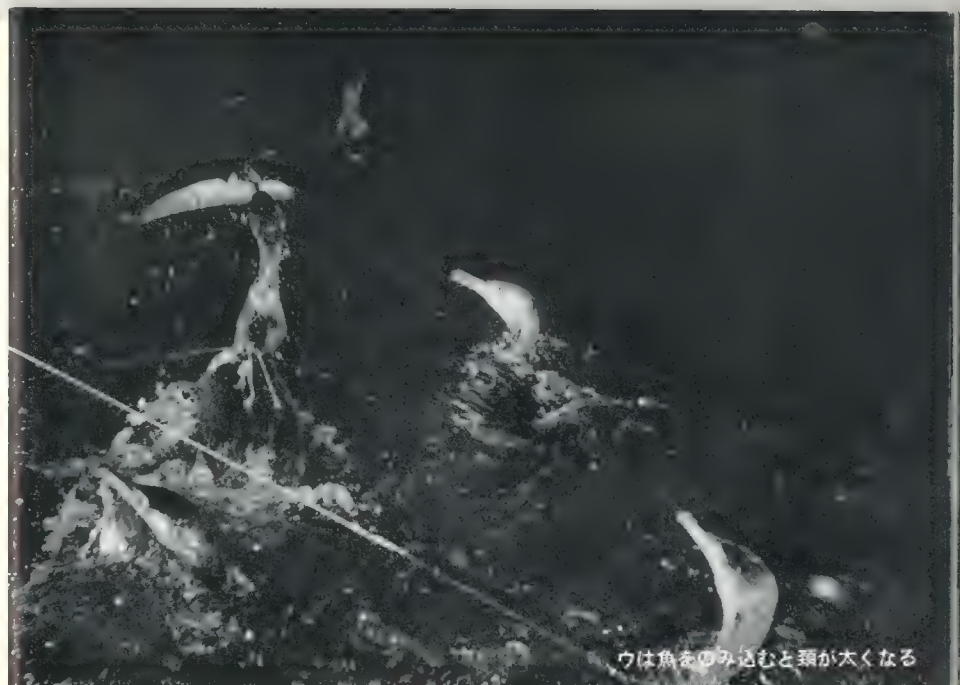
鵜舟の来るのを待つ

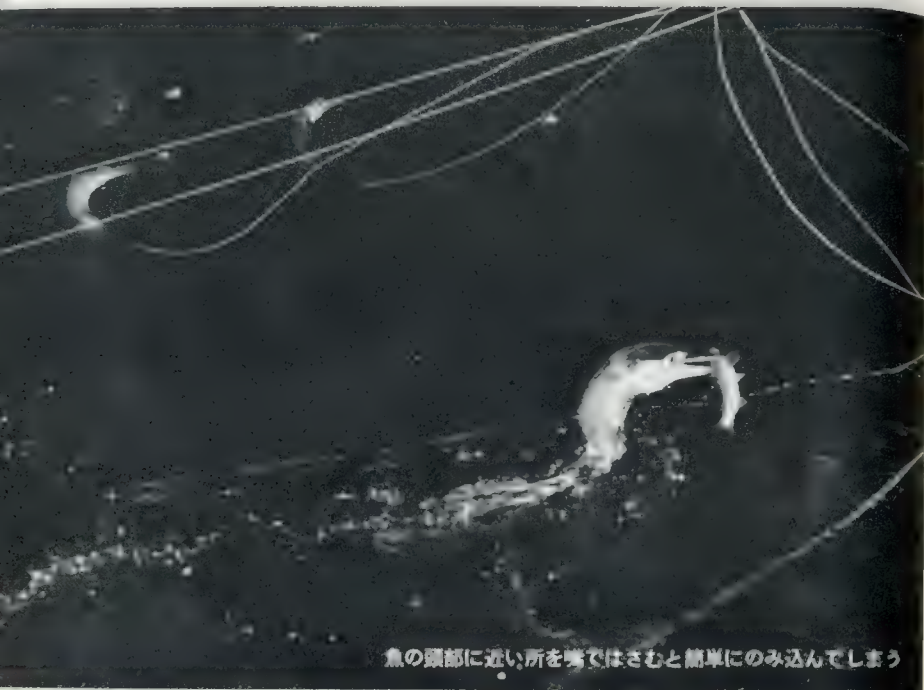
引き上げて魚を吐かせる

鵜舟の来る前に酔いつぶれる人も少くない

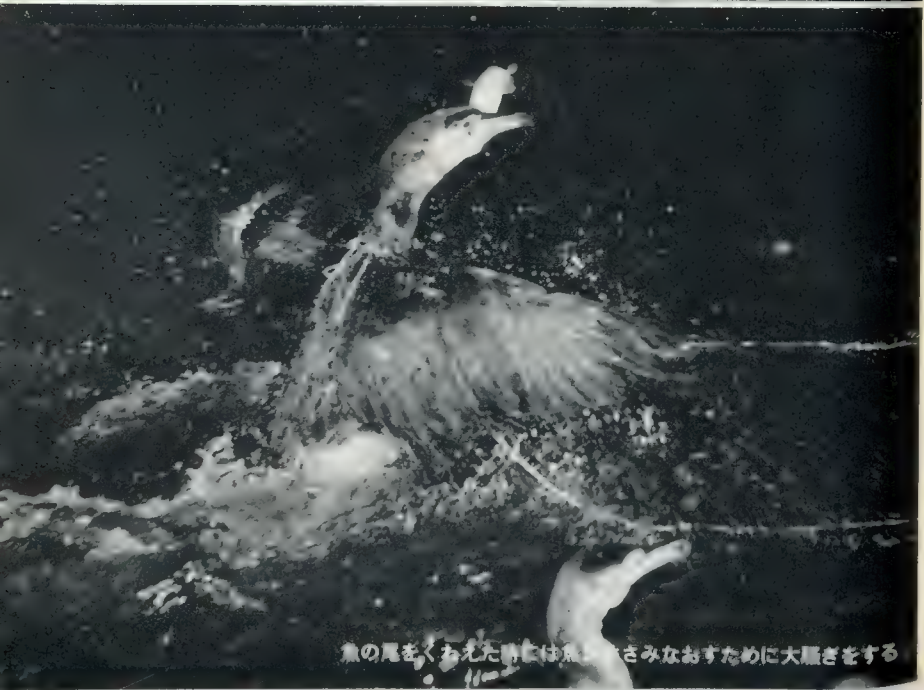
ウの活動を眼前に見る

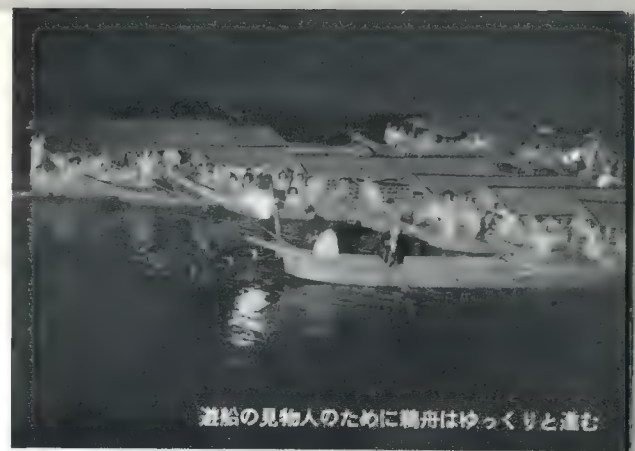
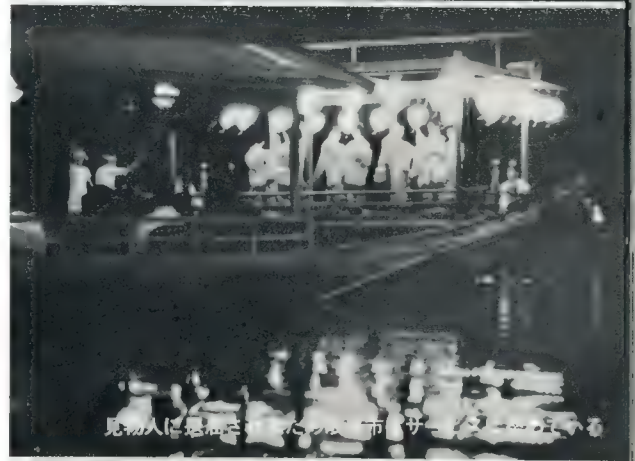
空腹のウが本能的に魚を獲る性質を利用したのが鵜飼で，満腹すればウは働かなくなる．空腹のままでは長時間の労働に耐えられないので首結のゆるみを通して小魚だけは胃に入るようにする．ウが獲った魚が小さければ水中でのみ込んでしまうが，大きければ一度水面に浮かんでからのみ込む．ウが魚をのみ込む時には必ず魚の頭からのみ込むから，魚を吐かせる時には，魚は尾を先にして吐き出される．

首結をして魚をのみ下す

ウは魚をのみ込むと頸が太くなる

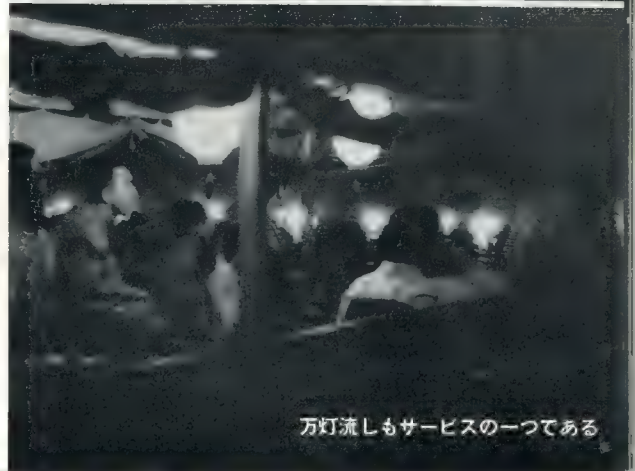
ウが魚の尾をはさむとはさみなおして頭からのみ込む

魚の頭部に近い所を嘴ではさむと簡単にのみ込んでしまう

魚の尾をくわえた時には魚[illegible]さみなおすために大騒ぎをする

[illegible]

長良川の鵜飼の遊船は岐阜市の直営で，遊船64隻を備えて観光客のもとめに応じている．1956年には約13万人の観光客が乗船したが，その中約6千人は外国人であった．7月，8月には見物人が最も多く，その頃には前もって予約しておかないと遊船には乗れない．近年バスが普及してきたので日帰りの見物人が多くなった．

納涼台も鵜飼の見物席

遊船の見物人のために鵜舟はゆっくりと進む

見物人に[illegible]市[illegible]サー[illegible]る

万灯流しもサービスの一つである

鵜飼の後でウを[illegible]べる

捕獲されたウは人に馴れるまでに十日位かかり、それからよく馴れたウと一緒にされて訓練を受け、漁に役立つまでに三年はかかる。飼われたウの寿命は十二、三年であるから利用年限は約十年位である。しかし中には二十七年間も飼われたウがある。鵜飼中に手縄が水中の障害物に引掛り、ウが水面に浮上することができなくなり溺死することが毎年二、三回はある。

ウにも種々の病気があり、病気で死亡するものもあるが、近年鵜飼中の労働の激しさが減るに及んでウの病気も著しく減少したという。鵜匠が二十羽から二十二羽のウを飼っていると、年々二、三羽ずつ病気や事故で死亡するから、毎年それだけ補給しなければならない。ウは新しい環境に早く適応できる動物で、人によくなつく性質があり、馴らせば人に対する警戒心がなくなってしまう。鵜匠が新鵜を訓練する時にはウを決して叱ることもないが、空腹にして置いて餌で仕込むようなこともない。馴れたウに対する鵜匠の愛情は特に深い。殉職したウは長良河畔のウの塚に葬られ、毎年供養の施餓鬼が営まれている。

鵜飼の後で鵜匠の説明をきく

相模川の鵜飼

鵜使いの手にのせてウを運ぶ

昔ひろく行われた鵜飼は徒歩鵜飼、或いは徒歩使という一人一鵜の鵜飼であった。現在でも関東以南の所々で寒鮒を取る目的で昼間行う鵜飼はこれである。この頁の写真は相模川の鵜飼で主に鮎をとっている。川に網を張り、遠くから鮎を追いこんでおいてからウを使ってとる漁であるが、現在ではむしろ観光用である。

ウは[illegible]

水流の速い所では手縄を使

魚を800瓦以上も頸に入れて帰って来るウもいる

魚を見せてウを捕える

島根県高津川を中心に行われる鵜飼は、中国の鵜飼に酷似している。この地方には四百年前から鮎漁の鵜飼があったがアユを絶滅させぬため明治初年に現在の鵜飼に転向した。この鵜飼は十二月から三月まで益田市付近の川をつぎつぎに移動しながら流れのない所で昼間行い、手綱を用いない。鵜飼の開始数日前から餌を制限し、ウの食欲を高めておき、首結をつけて川に放すとウは本能的に魚を獲り、頸いっぱいになると舟に帰るか近くの岸に上る。鵜使が魚を見せるとそれを食べに寄るから捕えて魚を吐かせ、小魚を一匹だけ首結を通して胃の中へ押し入れてやる。ウはそれで満足して次の漁を行う。獲る魚はイナ・コイ・フナ等で、一日数時間も鵜飼を行い一羽で四瓩も獲る。鵜飼が終り家へ帰ってから首結をつけたまま小魚を与え頸いっぱいに魚を入れたところで首結を解き魚を胃に入れてやるが、ウの頸を枡にして魚を量って与えるのである。現在この鵜飼を行う者は四名居り、一人で五羽から十羽のウを使う。古いウと新鵜を使うが新鵜は十一月初旬に捕えて約一週間の訓練で使えるようにする。

ウを放す前に氷を砕く

流れのない沼や川が漁場である

魚の運動の鈍い時期の漁であるからウも人もゆっくりかまえている

漁が終ると町まで車をひいてかえる

背負った籠の中にはウが4羽入っている

鵜飼のなかやすみ

島根県高津川地方の鵜飼は冬の間の3ヵ月だけ行うので，鵜飼のない9ヵ月の間は毎日鵜に約800瓦の魚を餌として給与しなければならない．餌代だけでも1年1羽につき1万円近くもかかるので，ここの鵜飼は漁業としては経済的には成立たない．その維持すら難しい．そこでここの鵜は夏になると岩国の錦川や岡山の旭川などで行なわれている観光鵜飼の鮎漁に出稼をすることにより，やっと命脈をつないでいる状態である．

ウのとった魚

鵜飼の時間が長いので時々休息をする

鵜飼終了後，小さな魚のみを餌として与える

この籠にはウが2羽ずつ入っている

岩波写真文庫目録

新刊

228

229

230

漁の終り．ウを舟ばたにならべて魚をはかせる